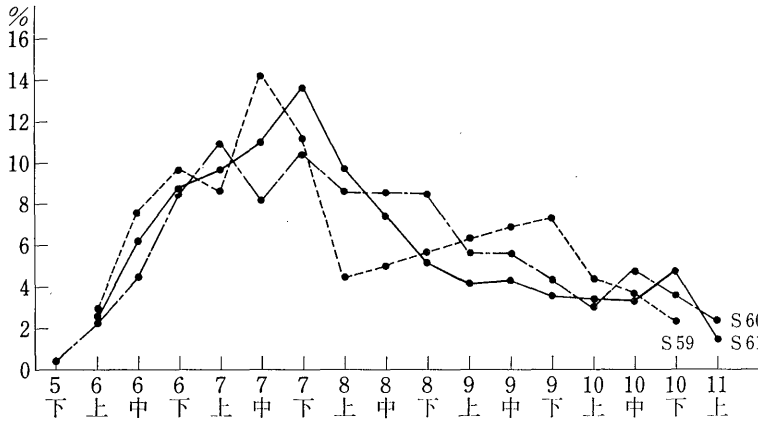




ピークがくるが、その直後に「肥料切れ」が重ると、その後の樹勢が極端に低下し、著しい減収となる場合がよ

第2図 ハウスピーマン旬別収量割合



表一3 従来までの施肥基準

(10a)

	資材名	施用量
土壌改良	堆肥	4~6トン
	発酵鶏糞	200~300kg
	苦土炭カル	} 土壌分析値による
	苦土重焼燐	
	F T E	4kg
基肥	S 15号	140kg
	NS 262	70kg
	成分量	15.4-18.2-15.4
追肥	NS 604	70kg
	NS 248	70kg
	成分量	25.2-9.8-15.4
	合計成分量	40.6-28.0-30.8

注) 1回の追肥N量は3~4kgとする。

くある。生育が長期になるため基肥だけでは無理なので追肥が必ず必要となるが、その時期の判定が難しく、遅すぎたり、施用量が少なすぎたり、逆に多すぎたり、又、追肥作業も重労働となっていた。

一度、「肥料切れ」になるとその後の樹勢回復までに相当な日数がかかり、結局、大きな減収になる。地力向上のための方法を行いながら表3のような施肥を行ってきた。全チッソ量の約60%は追肥として施用するが前記のような問題があった。さらに施肥位置がベット表面や肩等が中心になり、根のある位置に施肥できなかつたり、液肥による追肥でも、施用ムラが起きる等の問題もあった。

ロングの基肥時施用方式を表4の基準で行うことにより、①生育途中の肥料切れの防止、②追肥労力の省力

化、③生育の安定化(生育の過不足が少なくなった。)

④収量の安定化(個別の収量差や年次別の収量差が少なくなった。)等の効果があり、年々ロングの使用農家が増加している。しかし、図2のピーマン旬別収量割合のグラフでもわかるように、時期的に収量変動が大きく、生育量も違う。樹勢の変化も大きく、毎年、一時的に落花が発生したり、生育が停滞する場合もある。ロング施用により、一定量、継続的な肥効を期待することはできるが、生育のポイント時には、やはり、数回の追肥は必要と思われる。致命的な肥料切れや極端な樹勢低下を防止することができる

ロングは、地力チッソ的な考え方の中で使用し、その事で収量の高位平準化を達成することができた。

4. 今後の課題

生育量の推移、収量の旬別割合、地温の組み合わせ割合や量を検討し、より、生育に合わせたロングの使い方を確立したい。そのことにより、数回の追肥作業をなくしても、生育及び収量推移に合わせた施肥管理を行えるようになり、より収量の安定、多収を達成することができる。

当地区におけるピーマンの作付は年々増加傾向にあり、10トン獲りの達成とその安定、省力化、品質の向上等が当面の課題であり、その解決により一戸当たりの栽培面積を拡大できる。それらの解決方法の一つとして「ロング」の施用法確立が急がれる。

表一4 ロング施用の施肥基準

(10a)

	資材名	施用量
土壌改良	堆肥	4~6トン
	発酵鶏糞	200~300kg
	苦土炭カル	} 土壌分析値による
	苦土重焼燐	
	F T E	4kg
基肥	S 15号	100kg
	NS 262	70kg
	成分量	13.4-16.2-13.4
追肥	ロング 140	80kg
	ロング 180	120kg
	NS 248	生育により
	成分量	28.0-24.0-28.0
	合計成分量	41.4-40.2-41.4

注) ロングは基肥施用時に施用する追肥のNS248は、生育状況に応じて施用する。